

---

# 太陽のカケラ

雪野 椿姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

太陽のカケラ

### 【Nコード】

N7416S

### 【作者名】

雪野 椿姫

### 【あらすじ】

おとなしく、いつも一人ぼっちな15歳の少女、きしのひまわり岸野向日葵。ある日、超ラブラブな両親に振り回されせっかく受かった高校（女子校）からほかの学校に行くことに！？しかもその学校はまさかの元男子校！！一年年に女子が数名しかないという…

しかし向日葵には大きな問題が…！？

色々な人出会い成長していく向日葵の甘い青春ストーリー！

HR：う…嘘でしょ!?

朝、目が覚めると青いカーテンを通り抜け心地よい日差しが入ってくる。

目覚まし時計や、人の声などやかましい音ではなく美しい鳥のさえずりとともに、向日葵は目を覚ました。

枕の周りに幾つかあるぬいぐるみを整えて、向日葵は階段を下りた。

向日葵の家は三大家族と一匹。

向日葵と母親と父親とインコ。

彼女は動物嫌いのため、犬や猫がダメなのだ。なので、インコを飼っている。

「あら、おはよう向日葵」

「おはよう」

眠そうに目をこすりながら、母と父に返事をする。

「あ、そうそう お父さんとすみれちゃんね 引っ越そうと思っただ」

「…いくら四月一日だからってそんなの引っかかりませんよ。」

春のはじめ。

入学、進級の季節。

向日葵も十五歳のため、小さい頃からあこがれていた「赤峰学園」に通うことになっている。

部屋には新しい制服がある。

「嘘じゃないわよ？ あの制服だって本当は近所のお姉さんのお下がりだし…もう入学しないって連絡しちゃったし…」

向日葵の母である、董<sup>すみれ</sup>は目玉焼きを焦がさないようにフライパンを動かしながら答えた。

「え！ 嘘！？ 新しく買ったのかと… っていうかそれを早く言うってよ…」

「すみれちゃんが、わざわざ遠くまでクリーニングに持っていったからね」

新聞を読みながら父、雅人<sup>あやひ</sup>も話し始める。

「違うわよ、制服をくれたお姉さんの着方がよかったのよ」

「ってその制服着てたのって、すみれちゃんじゃないの？」

「あ、ばれちゃった？」

「もう、可愛いなあ すみれちゃんは」

(…バカみたい)

向日葵はため息をつきながら、朝ごはんを食べる。

微笑みあう二人は、十八歳で結婚して向日葵を産んだので、まだ三十代前半なのだ。

年の差が少ないと思うと、それはそれで向日葵にとっても苦痛なのだった。

「…でさあ どこに引越すわけ？ それと、今度どんな学校なの

「？」

「まあここからは飛行機で行くくらいいきなりねえ…学校は、そこらへんの人たちみんな頭がいいみたいで…向日葵に合う学校があるかしら？」

向日葵の皿に目玉焼きをおきながら董が答えた。

「何気にそれ傷つく…」

苺ジャムの赤がパンの白さを引き立てる。  
そのパンを、向日葵は少しずつ食べ始める。

「え、パパもうみつけたよ？」

「本当に！？ さすが雅人さんだわ〜」

(やってらんない…)

二人がその学校の資料を探している間に、向日葵は朝の支度をした。歯磨きをして、顔を洗って、長い髪をツインテールに結んだ。向日葵の髪はとても長く、腰の上まである。

「向日葵〜？」

「何？ 今行くけど…」

遠くから呼んでいたので、思わず大きな声で返事をしつつ、リビングに行き雅人から資料を受け取る。

「ふ〜ん…」

そこから見た感じはいい学校だった。  
周りに歩いている生徒たちも頭がよさそうだし、何より女の子としては気になる制服がとても可愛い。

「いいでしょ この学校」

二人はニコニコと微笑む。

しかし、向日葵はあることに気づく。

「…この学校さあ 女子あまりいなくない？」

「ああ…元男子校だからね」

「えっ!？」

向日葵の背中につめたい汗が流れ落ちる。

向日葵は、男子恐怖症なのだ。

「ちょっとそれは…」

「ん？ どうかした？」

この二人に言うのはめんどくさいと思い、二人に男子恐怖症であることは告げていなかったのだった。

「元男子校嫌なの？ いいじゃない、彼氏できるかもよ？」

董も何気に嬉しそうだ。

「でも、パパもう入学届け出しちゃった」

「だしちゃった　　じゃないわよ!」

思わずいつもはおとなしい向日葵も、思わず声を荒げて机をバンツとたたいてしまう。

「…ダメだった?」

「はあ…分かった、その学校行くよ…四月八日前後には向こうについてるようにしたいんでしょ?　なら今から荷造りはじめなきゃ…」

(KY…)

向日葵はため息をつき呆れながら、自分の部屋までの階段を駆け上がり、部屋に入った。

ドアの前でしゃがみこみ、つぶやいた。

「もう…嘘でしょ!?!」

雅人はタバコを一本出してきて火をつけると、一回吸ってから灰色のような白いような煙を吐き出してから

「向日葵、あの学校嫌なのかな?」

「…でも三歳になるまであそこで暮らしてたんだから大丈夫だと思っただけ…」

今まで洗いものを一度やめ、相手の話がよく聞けるように水を止めながら答えた。

「でも三歳までのことって、覚えてること少ない？」

「うん…そうかもしれないわね」

董は、また洗い物を始めた。



HR：う…嘘でしょ！？（後書き）

新しい作品を書かせていただきました！  
登場人物視点ではなく、普通に書いていこうと思います。  
がんばりますのでよろしくお願いします。

## 一時間目 男子恐怖症になった理由

向日葵は荷物をまとめていた。

引越し業者の文字が書かれたダンボールにつめては、ガムテープで封をした。

荷物が増えれば増えるほど、向日葵の憂鬱感も比例する中、誕生日に買ってもらったぬいぐるみ、小学校を卒業したときに買ってもらったオルゴール…色々な思い出もガムテープの中につめていった。今回で引越しは三回目なので、思ったよりもスムーズに荷造りは進んでいった。

「向日葵〜？ お友達にお手紙とか書かなくていいの？」

董が、階段の下から向日葵に聞こえるように大きな声で言った。

向日葵は一度手を止めて、少し考えた。

向日葵に友達と呼べる友達がいなかったからだ。

友達が今までずっといなかったわけではない。

男子恐怖症だって小さい頃とはいえ、生まれてすぐになったわけではない。

「書かない」

階段下の董に聞こえるように大きな声で返した。

荷物もあとダンボール二つ分になったくらいするとき、向日葵はふと本の間からちらりとみえるしおりを手に取った。

色鉛筆でやさしいタッチでかかれたヒマワリと、押し花のようにされたヒマワリの花びらが入ったものだった。

これは向日葵の兄からもらったものだ。

向日葵には、双子の兄がいた。

しかし、二卵性だったためあまりにいていなかった。

向日葵は背が小さめで可愛い印象。

兄は背が高めで頼りがいがある印象。

という対照的な正確だったため、兄妹に見られることはあっても双子に見られることは少なかった。

『向日葵は、世界で一番大切な俺の妹だよ』

そういつて向日葵をよく可愛がっていた。

向日葵もよく甘えていたし、兄妹仲はとてもよかった。

ある日、母と父が離婚することになり“大人の都合”という理由で、小学校を卒業すると同時に向日葵と兄は別れた。

それから連絡は取っていないし、今どんな姿でいるのか…すべて分からないまま。

別れ際に

『いつ、何があっても向日葵は俺の妹だからな』

といつて渡してくれたのが、このヒマワリのしおりなのだ。

今は実の母董は再婚し、雅人が向日葵の父となっている。

兄と別れてまもなく再婚をしたため、向日葵は男の人と話すことを嫌った。

雅人と董を受け入れることは出来ても、見ず知らずの男の人は、まだ受け入れられないのだった。

「お兄ちゃん…どうしてるかな」

泣かなかったけれど、向日葵の瞳はちょっと潤んでいた。そしてそのしおりをそっと優しく、ダンボールにいれた。

次の日、向日葵をのせた車は、引越し業者のトラックについて引越し先へと向かった。

向日葵は後ろの二人乗りの座席を一人で占領しぐっすり眠っていた。しばらくして向日葵は目を覚まし、最初はねっころがったまま、空を眺めていた。

青い絵の具に出来るだけ水を含ませたような、水色の空だった。ふっと桃色のものが窓を横切った気がして体を起こすと、満開の桜が迎えていた。

「向日葵、もうすぐつくからね」

そんなことを言われても、向日葵にはちっとも聞こえていなかった。上のほうで木と木がくっつき、花のアーチになっていた。

全部と言うわけではなかったが、憂鬱感がスッキリした感じが向日葵にはした。

引越し先の家に着くと、向日葵は家中を散歩していた。  
董に

「この家は、向日葵が三歳になるまでは住んでたのよ？」

といわれ思い出してみたのだが、やはり幼少期の記憶はあまり無く、思い出すため家中を歩き回っていた。

家は売らずにとっておいたということなので、落書きなどもそのまま残っているはず…

ある一つの部屋に入ってみると、動物のかわいらしくもナチュラルな壁紙が貼られた部屋があった。

「子供部屋…？」

（お兄ちゃんの手がかりがあるかもしれない！！）

そう思って部屋中を歩き回って見たものの、やはり見つからず部屋を出ようとした。

そのときドアにクレヨンで何かかいてあった。

けれど、幼稚園に入る前の子が書いた字なんて読めるはずも無く、そのままその部屋を出て行ってしまった。

したの部屋に行くと、さっそく董が可愛い制服を向日葵にちらつかせてきた。

「ほら、可愛いでしょ？」

「向日葵は本当に可愛いなあ」

（親ばか…）

向日葵は一度ため息をついてから、

「可愛い可愛いって…私も高校生で大人なんですけど？」

「身長が150とちょっとしかないのに？」

「うう…」

向日葵は董に急所をどつかれちょっとシユンとなってしまうた。  
身長が少し低めなのがコンプレックスな向日葵は仕方なく二人に巻き込まれるのだった。

しかし向日葵は知らなかった。

明日から苦痛な学校生活が始まるのだった。

## 二時間目 ピンチ！の始まり

「うう…」

次の日の朝、向日葵はがっくりと肩を落とし、半泣きになりながらリビングへと階段をおりた。

ドアを開けるとパンの香ばしい香りがしたが、向日葵はそんなことより憂鬱感が心を占領していた。

「どうしたの？」

雅人はタバコをくわえたまま、新聞から向日葵の顔を覗き込み言った。

その言葉に反応し、ウィンナーを炒めていた董も振り返り

「あら、元気ないじゃない」

「ううん、大丈夫ちょっと学校が新しくて心配なの」

向日葵はトーストに、マーガリンとブルーベリーのジャムを塗ると小さな声で「いただきます」とつぶやき少しずつ齧り始めた。

雅人も董も不思議そうになりながらも、そんなに心配でもなさそうだった。

歯磨きをして、顔を洗って髪をかわいらしくツインテールに結んだ。そして真新しい制服を着た。

通学路の地図を見て、

「もっていかなくていいのか？」

と雅人に聞かれるも

「大丈夫だよ」

向日葵はそう答えた。

しかしこのミスが、普通の人には“運命”と呼べるものの、向日葵には“悪夢”にしか思えない出会いに直面することとなった。

しばらくスムーズに通学路を行ったところ、住宅街に差し掛かった。

「あれ…？ どうしよう…ここ曲がって、あっち曲がって…」

迷子。

方向音痴な人なら、よくあるこの現象。

だが、方向音痴ではない向日葵にとって複雑な道も行き方さえ覚えていれば、迷うことは無い。

しかしどこで間違えたのか、道に迷う。

「みゆう…どうしよう…」

色々な路地を曲がってみたり戻ってみたり…

けれど学校にはたどり着けない。

自分がどこから来たのかも分からない。

「どうかしたの？」

「ひゃう！？」



かけられた声。

男声だったので向日葵は必要以上に驚き、振り返る。

限りなく黒に近い茶色の髪に、優しそうな笑顔をした一人の男子生徒……

向日葵の目的地である学校の制服を着ていた。

「……見たことないね、転校生？」

彼は近寄ってくる。

普通の女子生徒なら、「はい」と答えて迷子になっていることを伝え、学校まで送っていつでもらう……が、  
向日葵はなるべく俯き、目を合わせないようにした。

「は……い……」

相手に聞こえるか聞こえないくらいの小さな声で言った。

「そっか、ここら辺は路地があって迷いやすいから気をつけてね」

(迷子って……気づかれてた?)

ニツコリ微笑みどっからどうみても変質者でなければヤンキーでもない彼に恐怖心を抱く向日葵。

「急ぎじゃなければ送っていいんか？」

「……」

向日葵は俯いたまま黙り込んでしまふ。

彼はちよつと困った様子だ。

「どうかした?」

少しかがんで向日葵と目線を合わせる。

(ひゃあああああ!?!?)

普通の少女とは違う」「ひゃあああああ!?!?」「がでてきてしまった  
向日葵。

「う…あつ…ありがとうございます…」

それだけ告げて向日葵は駆け出した。

「あれ? 迷子じゃなかったかな?」

向日葵の駆け出していった方向が通学路だったので彼はきょとんと  
首をかしげた。

「えっと…今日は女子の転校生を紹介します。」

担任の先生は女…といえど独身ではいけない年齢の独身さん。

「うんうん」

向日葵はそんなような言葉を廊下で聞いていた。

(ううっ…どうしよう、何気にみんな乗り気じゃない?)

「うんうん」

ニコニコしながらこちらへ来るように手で示した先生にちょっと憎しみを覚えつつ、教室の一番前に立った。

「あ、えっと…岸野向日葵です。よろしく願いします」

軽くお辞儀をして、向日葵の視点が床へ行ったとき、

「可愛いじゃん」

という声が教室のいたるところから聞こえる。

それと同時に向日葵の体にサアツと冷たいものが襲う。

「知ってると思うけれど、ここ元男子校だから女子は…五人しかないけど、深く気にすることは無いですよ」

またニコリと微笑む。

向日葵はまた先生にイラつきを感じた。

(この学年は三クラス…ってほかのクラス女子二人ずつじゃない?)

「じゃあ、岸野さんはあの席ね」

「はい…」

机と机の間の通路を通る間、向日葵は視線を感じつつも目を合わせないように俯いて自分の席に着くと、またサアツとしたような空気が体を襲った。

「こんにちは」

ニツコリ微笑む少年は、朝の男子生徒だった。

(ひゃあああああ!!?)

本日二度目の言葉を叫び、これからの大変な生活の序章が始まったのだ。

三時間目 か…囲まれてしまった!?

あまり周りの人に親しいと思われなくなかったのか、向日葵はおとなしく彼の隣に座った。

「岸野さんは、今日の授業午前だけですから」

転校生なので、クラスと学校の状況を把握するのみで今日は下校。

(今日は早く帰れるけど、明日からどうしよう…)

不安は減ることも増える事も無く、心の中を支配していた。

一時間目の授業中は、先生の授業をろくに聞かない隣の“あいつ”が話しかけてきた。

最初のほうは目を合わせず、二人ともノートをとりながら会話していた。

「岸野って、したの名前向日葵だよな？」

「……そう」

彼はクスツと笑って。

「いい花だよな」

「……うん」

出来るだけ話したくないと向日葵は思っていたうえに、先生に怒られないよう小さな声で彼の言っていることはほとんど上の空だった。

「俺は、藤堂日向とうどうひなたよろしく。日向って字は、向日葵の“葵”をぬい

たやつ」

「…よ…よろしく」

(お兄ちゃんと同じ名前…)

名字は違ったが、“日向”というのは向日葵の兄と同じ名前だった。瞳の色、髪の色は兄の日向とは違うので、向日葵は「似ていない」と判断し、あまり気には留めなかった。

「なんか朝から元気ないけど…大丈夫？」

「だっ…大丈夫ですからちゃんと授業受けてください。」

思わず強い口調になり、向日葵は日向と目が合ってしまう。

日向はあせって

「静かに！先生にばれるぞ」

「むう…！？」

向日葵の口をふさぐ。

幸いなことに後ろのほうの席だったため、先生に気づかれることは無かったが、向日葵の心内環境は、先生に怒られるよりも大きなものだった。

「…危なかった」

日向は安心のため息をつくとき向日葵の口をふさいでいた手を離れた。

「いきなりゴメンな」

謝って向日葵を見ると、彼女は軽く震えていた。

「やっぱり具合悪い？」

日向は向日葵の額に手を当てる。

「…やっ…めてください…」

「だって、熱あるかもしれないよ？」

向日葵は怖くなってギョッと目を瞑った。

だんだん周りの生徒たちも二人に気づき始めた。

「…平熱かな？」

曖昧な診断をして、向日葵から手を離す。

そんなことをしているうちに授業が終わった。

先生が出て行くと同時に、向日葵の悪夢は始まる。

「やめてっていったじゃないですか!？」

「心配だったから」

ちよっと苛立った口調で言うも、通じていないのか日向は真顔で返答をする。

そうこうしているうちに、向日葵はクラスでたった一人の女子なので注目の的となる。

「会って一日で、しかも一時間目で口説くななんて藤堂もやるな」

短めに切られた髪と、さわやかな笑顔がスポーツ系の男子を連想させる彼が、冗談っぽく日向に話しかける。

「口説いてないよ」

日向は笑って応答する。

「それはよかった、女の子を独り占めなんてそんなヤツじゃないかな。俺の名前は、坂本龍太郎さかもとりゅうたろうよろしくな！」

龍太郎はニツと笑って向日葵に自己紹介をする。

彼は、世間で言う『スポーツ系男子』で、最終的に同じ部活のマネージャーとかに告白されてしまうタイプの男子。

「…よ…よろしく…」

(…このままでは三日は持たない…)  
俯いたまま向日葵は小さな声で返答する。

「向日葵ちゃん可愛い」 僕の名前は、藤宮蓮ふじみやれんよろしくね！」

「あう…はい」

猫耳のついたフード付パーカーをブレザーの代わりに羽織っている彼は、いわゆる『可愛い系男子』お姉さん系の女子から可愛がられるタイプ。

二十人前後の男子に囲まれてしまった向日葵…

(明日から…どうすればいいの…!?)



## 四時間目 美しい少女

(ど…どうしよう…囲まれちゃったよお)

向日葵はクラスの大半の男子に囲まれてしまい戸惑う。

どうやったたらこの状況から抜け出せるのだろう。そのことで頭が一杯になっていた。

まずクラス中を見渡してみた。

向日葵の周りにいる男子以外にも、自分の席で本を読んだり、寝ていたりしている人…とさまざま。

ふと教室の一番端の列の一つの机は、使われていないようだった。

(…あの机)

すぐくは気にならなかったがなんとなく心に引っかかるような感覚が向日葵にはした。

「…岸野？どうかした？」

日向が遠くを見つめる向日葵を心配し、顔を覗き込む。

「ひゃう？ …いえ、何も…」

顔を覗き込まれて驚きながらも、平常心を保とうとなるべく普通の言葉で話そうと向日葵は心がけた。

「…机か？」

龍太郎が向日葵の見ていた方向をみて机があったので向日葵に首をかしげながら聞く。

「はい、誰も使っていないようなので…」

「あれはねえ、海斗くんだよ」

蓮が小さなくまのぬいぐるみを見つめながら言った。

「かいと?」

「そう、やまだかいと山田海斗」

向日葵が不思議そうに首を傾げると、三人はちよつと真剣そうな顔つきになった。

「どうしていないのでしょうか?」

「あいつの家は母がいないんだ、父のほうは仕事をしてないみたいで…自分で働いて学校きているんだ。」

「…」

向日葵はそれ以上何も言わなかった。

山田海斗という一人の少年について少し知りたいと思った。

そして出来ることは何かしてあげたいと思った。

向日葵はそのまま下校し、家で山葵と遊んでいた。

自分の部屋のベッドの上につつぶせで寝て、人差し指の上に山葵を乗せていた。

「山葵はもし、ほしいものがあって…でもお金が無い…そんな時どうする?」

ふと海斗のことが気になり、向日葵は山葵に話しかけた。

「ワザビ、ピー」

山葵はそれだけ答えた。

(やっぱり動物に話しかけてもダメかな)

話したことが無ければ見たこともない人。その上男子恐怖症である向日葵は自分で自分は何も出来ないことはわかっていた。

「私に…何かできるかな？」

「ピー、ヒマワリ、ピー」

「…かわいい」

向日葵は黙って山葵の頭をなでながら可愛がった。

次の日、向日葵は登校中に誰にも会わないように早めに家を出た。通学路も間違えずに行けた。

向日葵が下を見ながら廊下を歩いていると誰かにぶつかった。

「きゃ!?!」

「あ、すみません…」

ぶつかった相手は、真っ黒な髪を腰の辺りまで伸ばした頭のよさそうなおんなの子だった。

「…あれ？ 女子生徒…転校生さんですか？」

「あ…はい」

二人は立ち上がり、床に倒れて汚れた制服のほこりをはらった。

「女子生徒少ないから、びっくりしちゃった。私の名前は、じんぐう神宮桜  
よろしくね？」

「私は、岸野向日葵。こちらこそよろしく。」

人と話すのが苦手な向日葵でも、学校全体で十人ちよっとしかいな  
い女の子なので、桜とすぐに仲良くなった。

「そうですね、私のクラスは女子二人ですけど、向日葵ちゃんの  
クラスは一人ですから…大変ですよね？」

「はい、私…男の人と話すのが苦手で…」

「そうなんですか！？ それじゃ尚更ですね、でも大変なことがあ  
ったら私とか、女子だって一人じゃないんですから気軽に相談して  
くださいね」

（優しそうな人…）

向日葵よりも背が高く、スタイルもよく…

なにより笑顔が優しそうな人で、向日葵はちよつとあこがれた。

「はい」

向日葵も思わず笑顔になった。

「あ、それと」

「なんででしょうか？」

桜が急に思い出したように言い出した。

「クラスで女子一人って…強制的に学級委員じゃない？」

「…え？」

（がっ…学級委員！？）

向日葵は人前にでるのが苦手だったため今までずっと避けてきた難  
関…

（しかも二人ってことは…男子と接する機会が増える…ってこと！  
？）

## 五時間目 貧しい少年

『誰にも会わないように』

と早めに家を出た向日葵だったが、一人の美少女と会った。

「で、でも…私なんかじゃ…」

おどおどと、小さな声になっていってしまつ向日葵。  
俯く彼女を励ますように桜は声をかけた。

「やってみないとわからないよ？ それに、やらないよりはやるほうが得るものが大きいと思う」

「ダメですよ…ひ…人と話すのも苦手なのにみんなの前で話すなんてそんなこと…」

「人と話すのが苦手なのを克服するチャンス。いましかないよ？ 悲観的に考えてはダメ、本当にそうなつちやいますよ？ 自分を信じてあげないと」

悲観的に考えるのが向日葵の悪い癖。

たった十分ほど前にあつた人なのに、癖を読まれてしまつ。

桜は一度咳払いをしてから

「…ごめんなさい、えらそうですよね」

先ほどより控えめで自信の無いような言い方だった。

「…大丈夫です」

向日葵は偉そうとも尊敬しようとも思わなかった。ただ、自分が今いる状況…それは社会的に許されないのだということを、心から感じさせられたのだった。

「でも…とにかくがんばるしかないと思うな」

「私もです… がんばってみます。」

「じゃあ私も応援しますね、学級委員になろうと少し考えていますし…お互いがんばりましょう。ではまた…」

桜はそっぴい残して去っていった。

教室に入ると生徒が一人いた。

廊下ですつと話をしていたので気づかなかったのだろう。

向日葵は何も言わず、自分の席に座った。

(…あれ?)

よく考えてみるとあの生徒は…一番端の列に座っていた。

彼は頬杖をついてどこか遠くを見ていたので目が合うことは無いだろうと思いい、向日葵はしばらくその人を見つめていた。

…が、彼は向日葵に気づき目が合ってしまう。

向日葵が急いで視線をそらすと

「君は…岸野向日葵ちゃんだよな?」

頬杖をついたままニッコリ微笑んだ…けれど向日葵は床を見つめた

ままで彼など見ていない。

「…はい…あなたは、山田海斗くですよね？」

向日葵はちよつと顔を上げたが、やっぱり怖かったのか目をそらしてしまふ。

海斗はクスツと笑って

「よく知ってるね、僕昨日学校来てなかったのに」

「一つだけ…机がぁいているのは変だと思って、藤堂君たちに聞いたんです」

「そっか…」

話がひとしきり終わって、沈黙がやってくる。

向日葵は耐えかねて話しかけようとするがやっぱり勇気が出ない。

「僕の事情も日向とかから聞いたの？」

「は…い…」

「日向は何でも話しちゃうからね、秘密にしてほしい話があったら日向に話さないほうがいいよ」

笑顔で海斗が話すので、向日葵は不思議と彼と目を合わせ話すことが出来た。

彼は続けた。

「そっだな…陸人とかのほうが口は堅いな」



「…りくと?」

「あ、まだ話したこと無いの?」

「…はい」

向日葵は小さく頷いた。

すると海斗は向日葵に近づき耳元でささやいた。

「あの人は俺様系だから気をつけたほうがいいよ?」

「ひゃあ!?!」

向日葵は驚き思わず悲鳴を上げてしまう。

「向日葵ちゃんって面白い」

(遊ばれている!?!)

海斗に笑われながらも、向日葵は『やっぱり男の子って怖いな…』  
と思うのであった。

「お…面白くなんか無いです」

「顔赤くなってるよ?向日葵ちゃんはこういうの弱いんだあ…ふん…」

頬を人差し指でぶにぶにされてしまう。

なんとなく海斗がさっばい目つきになる。

「やめてくださいよお…私全然Mじゃないです…」

「え？ 僕Sだって言ってるじゃないよ？」

先ほどの目つきになりきよとんとした感じで返答されてしまう。  
そして海斗は向日葵から手を離れた。

「女の子少なくて大変かもしれないけど、僕でよかったらいつでも相談にのるからね」

「はい」

笑顔も元に戻って向日葵は不思議に思った。

ふと彼の事情を思い出した。

『あいつの家は母がいないんだ、父のほうは仕事をしてないみたいで…自分で働いて学校きているんだ。』

辛い生活をしているのだと向日葵は最初思っていたが、彼の笑顔を見て辛そうではなかった。少し安心したのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7416s/>

---

太陽のカケラ

2011年10月8日12時37分発行